

インターネットの円滑な I P v 6 移行に関する調査研究会（第 1 回）議事要旨（案）

1 日時： 平成 19 年 8 月 8 日（水） 13：30～15：30

2 場所： 三田共用会議所 3 階大会議室 B～E

3 出席者

(1) 構成員（五十音順、敬称略）

荒野高志、江崎浩、小畑至弘、角村浩、國領二郎、齋藤忠夫、竹村哲夫、土森紀之、得井慶昌、内藤俊裕、中村正孝、二木均、花澤隆、牧園啓市、水谷幹男、三膳孝通、安田豊、渡邊武経

(2) 総務省

鈴木 総務審議官、寺崎 総合通信基盤局長、武内 電気通信事業部長、安藤 総務課長、谷脇 事業政策課長、黒瀬 データ通信課長、本間 事業政策課調査官、柳島 データ通信課企画官、中村 事業政策課課長補佐、高村 データ通信課課長補佐

4 議題

- (1) 調査研究会の運営方針について
- (2) 調査研究会の進め方について
- (3) I P v 4 及び I P v 6 の現状について
- (4) その他

5 議事要旨

【開催要項について】

- 事務局提案の「開催要項（案）」（資料 1 - 1）について、了承。

【調査研究会の公開について】

- 事務局提案の「調査研究会の公開について」（資料 1 - 2）について、了承。

【座長の選任及び座長代理の指名について】

- 齋藤構成員を座長に選任。また、齋藤座長より、國領構成員を座長代理に指名。

【調査研究会の運営方針について】

- 事務局提案の「運営方針（案）」（資料 1 - 3）について、了承。

【調査研究会の進め方について】

- 事務局より、「調査研究会の進め方について（案）」（資料 1 - 4）について説明。

○ 主な議論

（構成員）開催要綱では I P v 6 ありきとなっているが、実際の進め方では I P v 6 へ

行くまでのロジックを埋めようとしているようである。そのギャップについて説明いただきたい。

(事務局) 本当にIP v 6しか方法がないのか是非ともご検証いただきたいので、進め方としてはニュートラルに書かせていただいている。IP v 4が無くなるのであればIP v 6に移行するし、結論としてIP v 6化ではないという結論もあり得ると考えている。

(構成員) 国際的な動き等について、予算を取ってでもきちんと検討した方がよい。

(事務局) 事務局支援を三菱総合研究所にお願いしており、必要な情報がある場合には、できる限り対応できるようにしている。

(構成員) 2010年ぐらいにIANAのアドレスプールが枯渇するとも言われている状況で、2008年3月に最終報告ということで本当に間に合うのか、なるべく早い段階で中間報告を出した方がよいのではないかと。

(事務局) スケジュールについては、来年3月までに回答をお願いしたいということであり、議論の結論がより早く出るということであれば、ありがたいと考えている。

(構成員) 本研究会の議論について、世界に対してはどのように言っていくのか。

(座長) グローバル化については、日本政府や委員の皆様が色々とチャンネルを持っているので、それらを利用しつつ、うまくやっていただきたい。

○ 齋藤座長より、WG構成員として「ワーキンググループ構成員(案)」(資料1-5)のメンバーを指名。

○ 齋藤座長より、江崎構成員をWG主査に指名。

【IP v 4及びIP v 6の現状について】

○ 荒野構成員より、「IP v 4アドレスの在庫枯渇の状況とJPNICの取り組みについて」(資料1-6)について説明。

○ 江崎WG主査より、「IP v 6への移行に向けて」(資料1-7)について説明。

○ 構成員からの主な発言

・先ほどのご説明でPPPoEについて非常に高い装置を使っているという事例が挙げられていたが、当社ではルータよりも安いコストで調達できている。

このため、技術とコストは必ずしも一致するものではないと思われるので、そこは慎重に議論は行うべきではないか。

・IP v 4のルーティングにおいても、運用上、ある単位ではアドレスはアグリゲート(集約)されていくため、ルーティングテーブルの爆発がIP v 6によって解決されるかということ、必ずしもそういう解決策にはならないのではないかと。運用上の動向についても議論が必要である。

・ I P v 6は、I P v 4とかなり違うルーティング方法が根のところにあるため、今のようアクセス事業者の上にI S Pが乗るという事業形態が果たして成り立つのかどうか、というところに大きな疑問を感じる。この問題をI P v 6として問題解決するのか、事業形態をかえることにより問題を解決するのか、今後の方向性についてわからないが、慎重に海外動向を見極めながら技術動向を考える必要がある。

・ ビジネスの話や事業形態の話等は、非常に多種多様で意見がまとまるとは思えない。
このため、まずは技術でどうやって整備するかというところにフォーカスするべきである。その後で、ビジネスについて調整する場を別途設けるべきである。

・ 歩調をあわせなければならないことは、もうI P v 4にしがみつくとはいえないということが現実として見えているということ。それに対して、世界的にも良い形でI P v 6を展開できる環境にあるということさえきちんと理解しておけば、事業、ビジネス等は個々で考えればよい。

・ 嫌な技術の使い方をすると国際的に勝てないため、技術的に素直に理由付けできて、後の運用にしがらみの出ない形の方向を模索したほうが良い。無理をするとどこかに破綻が来るので、ここでは技術的にそういう方向性がどこなのかを見定める場にしたい。

・ 今に縛られない形でアーキテクチャの技術の検討を行うことにより、他の国に対しても展開できるような構造にすることが、ベンダ、I S P、海外に展開されるI S Pも含めて必要なところになっていこう。

・ 過去にとらわれるというよりは、新しい形、この国の中でどういう基盤が形成されるかをゼロベースで考えることが重要。将来、この業界がちゃんとまわるようなビジネスモデルを構築しなければいけないので、先に産業としてちゃんと成り立つ、そこは願わくは競争的なものであって、いろんなプレーヤーが参加できるようなものであって欲しいわけだが、そういう絵を描いて、その後で、どうやったらそれぞれが着陸できるか、着陸しやすいような移行のインセンティブ作りができるのかどうか、そういう順番で考えるのではないか。

・ I P v 4ネットワークでも日本は世界で特殊だといわれている。まず技術を中心に考えて、その結論が出た後、まだ必要なことがあれば別途、個別問題の会議等で行うようにすべきだろう。

【その他】

- 第2回会合は、WGの議論の進捗状況を見据えながら、座長と相談の上、別途決定。

以 上